



共古日録

三十六

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style, including the characters '共古日録' and '三十六'.



特別
15
1413
38



法久為職通と大いに記し諸品を預りてとる故と受け利
分の金は日數十百に日而文二五分のこり合ひ五十分
と下並けしと記し目々を記し、豊雲道具類梯
かき、好むもの、腰子、金、銀、刀、下駄、から、かき
取、り、を、あ、げ、十、五、三、が、書、け、と、書、く、ひ、り、書、あ、り、此
一、枚、も、う、度、々、と、の、め、に、と、り、と、り、下、並、車、と、り、取、り、
り、し、と、記、し、下、等、の、貨、金、を、北、山、初、年、か、り、高、堂、を
始、し、もの、有、り、し、と、記、し、
近頃始に記書を添へてあるに、諾否未姓名と記した
と記す者あり、
先記書あり受しこと、
誰か始しかも知らぬと東亞協會より
大倉集古館より五月一日始に
送るに、アリスの譯名を、洋風よりかき、向、か、の、受、取、り、と、記、し、

諾
否
御姓名

端書に送る
たにす

旭豆

て返すことすなり
大正七年四月電車中の廣告に旭豆なるものを賣出せ
あり、四月下旬より、この年の秋也至に旭豆、大正三
錢、と、記、し、と、賣、り、せ、り、これに先立ち、と、記、し、が、大、正、三、年
長、に、お、り、し、り、田、原、福、次、平、と、豆、糖、敏、と、各、即、長、に、贈、り、
し、と、記、し、新、聞、に、見、し、が、豆、糖、とは、豆、磨、を、い、ふ、か、う、の、こ、も
な、し、と、記、し、し、者、あり、し、り、これ、も、強、年、糧、秣、本、廠、と、
め、ら、し、り、田、原、三、平、と、米、味、老、婦、者、の、報、告、書、を、海、軍、第
大、佐、か、ら、賜、り、て、最、初、と、記、し、これ、に、よ、り、て、お、ん、の、お、ん、と、
せ、ら、れ、り、が、な、る、と、敏、に、記、し、て、成、功、せ、り、と、
大、正、七、年、三、月、廿、四、日、の、國
民、新、聞、の、安、原、生、活、誌、に、投、書、せ、り、甘、藷、田、原、三、平、と、
の、父、を、と、り、て、念、念、と、記、し、り、と、元、と、い、ふ、と、あり、し、り、

下巻平蕨交安紫股若院（？）と刻しあり其の
り也（？）也（？）を刻しあり



宣長の遺書

伊勢の室山妙樂寺の二修寺より高丁院（？）と云ふ
室山の墓あり又寺の大人の自画像及自筆の幅あり

山室の妙樂寺の二修寺より高丁院と云ふ
室山の墓あり又寺の大人の自画像及自筆の幅あり

ことある十年の春のふかしとてついでに山室の妙樂寺

そぶ巻の敏

かたしとてついでに山室の妙樂寺
ことある十年の春のふかしとてついでに山室の妙樂寺

と皮のみはるる三角形のまの蕎麦とあるを鶴の如く

米信家跡の
焼失す

米信の所は大火ありぬに福田所と云ふありて古来火災に
かたしとてついでに山室の妙樂寺
ことある十年の春のふかしとてついでに山室の妙樂寺

唐長十五年
板キリミ
都板と云ふ

切利支丹なる米のひる古の出板もの「加津佐板（？）加津高
其次は天草板又其次は長崎板なり此は都板なる
この世に出たりこれ「越前福井の鶴の如くありて
板の如くありて板本を「表題する

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

光行の事

今午に日光の奥より流れて来りしと云ふ也哉ありと
其也哉河系に押しあしと云ふ大なる石と云ふ物と云ふ
刻しんを手に取流れ出たりしやと云ふ物と云ふ
七つもの見事に也哉と云ふ巨石と思ひてお別れと云ふ
か何れも丸つちいなまゝと云ふと云ふ物と云ふ
置し来しものとの物候あり現に也哉と云ふ物の中
痕ありしと云ふ
日光停車場より日光町に近る所を越え幾十丁余あり電車
と自動車とあれど一行の来りしと云ふ物と云ふ物と云ふ
挽物製の上乗物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ
更、特色あるものを不見日光下照葉の柄を土俗的のもの
と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物

西武店三階の向せり寶物館主任古谷文吾と云ふと
茶茶上の道に傳つたり女と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
親善寺に到り丸心と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
の陣鐘ありとのをぬえ一覽せたり寺僧某の女覆を
写しあり鐘と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物

永正二七年
京大佛住

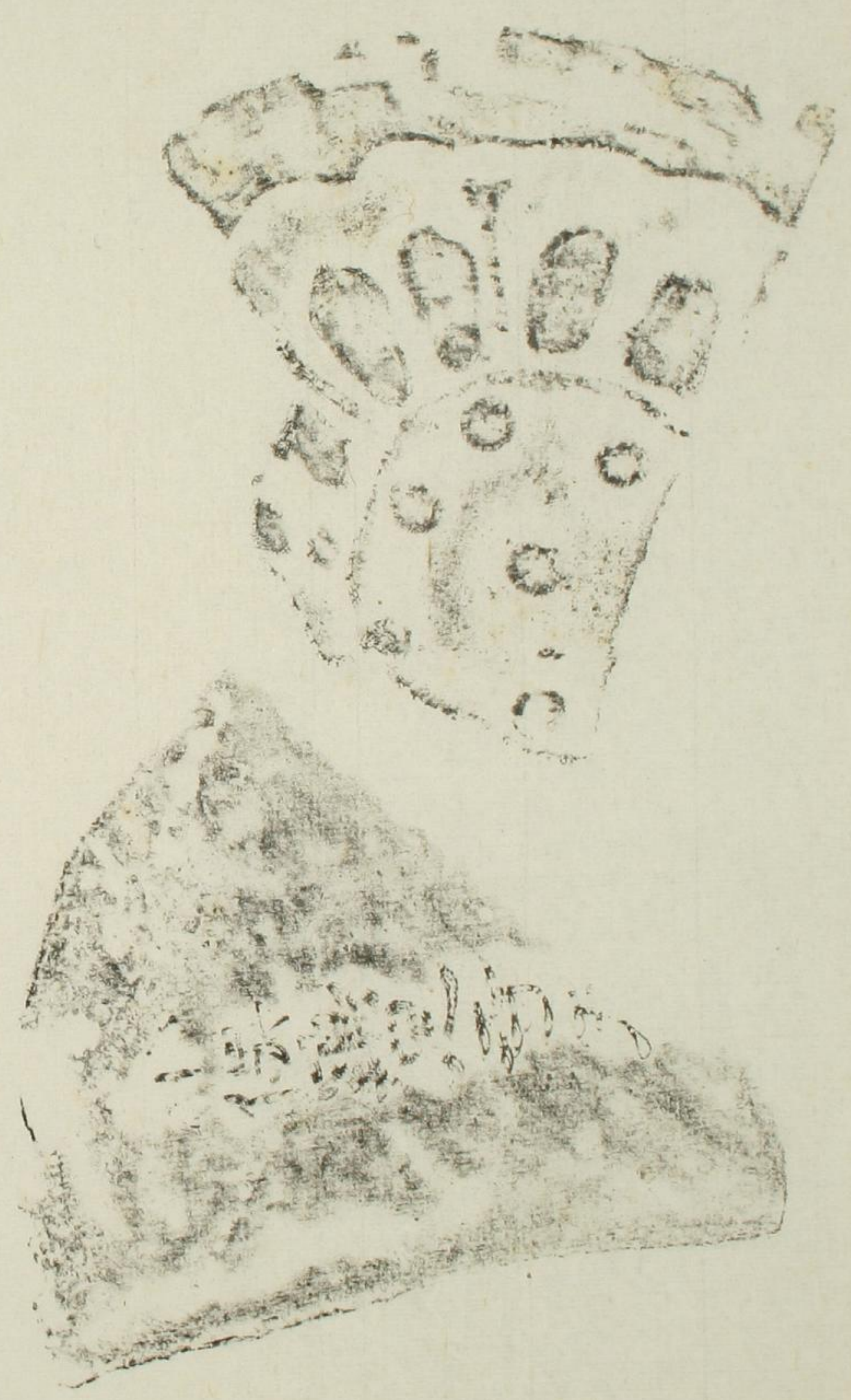
高市男生記

とありて茶唐草の縁横ありと云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
しあり物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物
の外にありと云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物と云ふ物



壬子の
九月廿
一行了
を踏
ふ
せん
心





二年三月廿五日
 大佛が
 乙未の先
 乙未の先

朝多の寶物館に
 乙未の先
 乙未の先

奉新造
 文
 甲寅三月十五日
 大工 宇都
 宮住人
 大和太郎

文月坊宗弘
 文月坊宗弘
 文月坊宗弘

塔の第一層幅より總高八尺四寸家根方形塔室圓形
銘塔室の外而二段に鑄出しあり
又鉄鑄納経塔ありこれ長方形の塔室あり銘

一字三禮如法書寫一乘妙典全部奉納

本願聖人良覺

元徳三年癸二月十五日

大工沙彌 行西

これは心形にして前の塔の類なり
銘二つあり大なる銅製なり
大なる堅八寸あり
奉施入日光山新言權現

于時應永二十年癸九月十八日甲戌肥後入道道

いさむも聖出りて多積六寸多銘

奉施入然の敬白大旦那九次良中禪寺内子蓮花石住人當上
人圓實坊昌基

應仁二年元月十八日

銘長考之巾子多銅色多
此刻としあり銘

奉施入

男體権現

建保五年打

金剛 淨智子

藏宣 生年

大工藤原三

錫杖歌 三本 三尊 佛 伴 心 及 左 右 均 有

日奉 光延 山

正應元年 以子 十月日 注 阿

銅鏡 一ツ 國室と なる 一ツ 五ツ 金 經 子 均 有 銘 奉 施 入

日光山中禪寺 妙見大菩薩 御寶前御器 一具十枚 年延元元丙子 六月晦日 世 當今皇帝 還城再位預 聞以 後醍醐院自 號焉

當上人火現
大工彦三高入道
施主比丘道賢
為壽於不朽

自筆下耳

おる此乙申の世當今宮に遷座毎位とあり延元元年
廿七後醍醐天皇御心より遷御ありしを云ふものにて預聞
以後醍醐院自筑馬とありしを親らて喜の代なる醍醐天
皇の代の如く王朝を盛時に復し給ふとのめりて
かく新さやしと思はるるに
もろろの元孝重すとの古物を
とひのて板十枚ありとの元孝の
此の古物をも
此の古物をも
此の古物をも

正安二年六月十五日



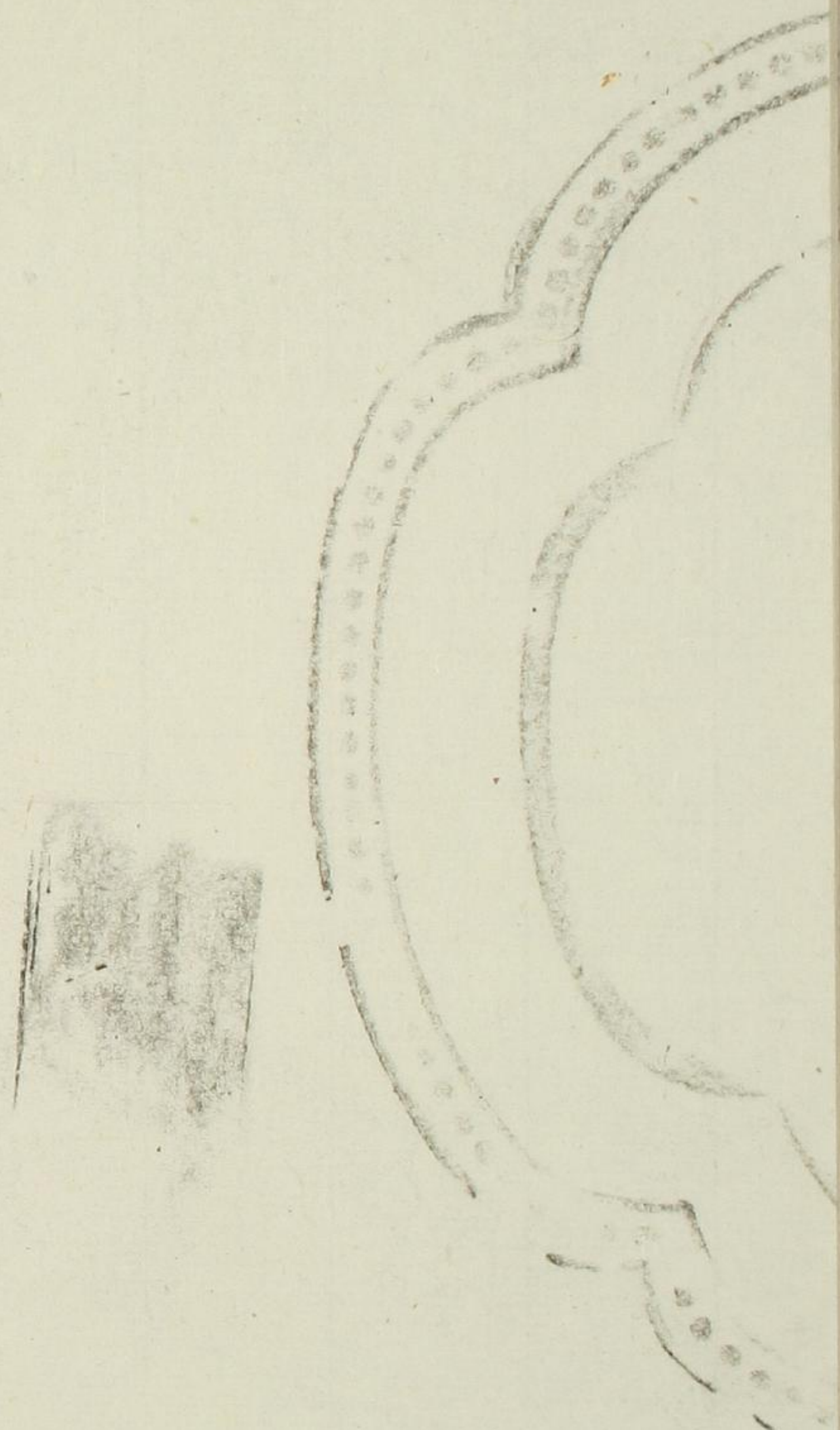
正安二年六月十五日

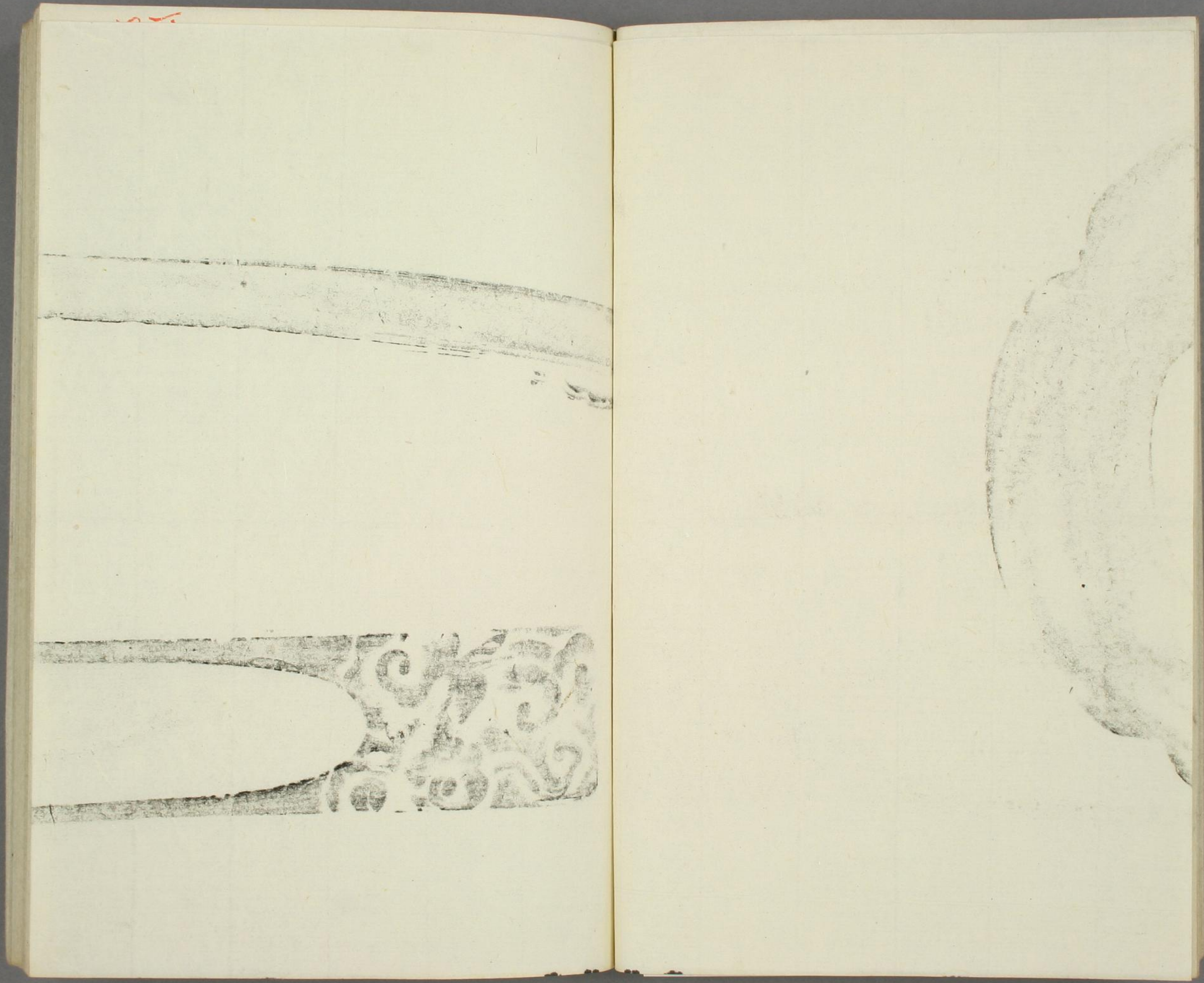


鐘の形
鐘の形
鐘の形

右掲形の如く銘あり山河水木道場鐘とありて此處
の年號ある形をヤギリとふもの如きものなり
其の外に銘あり古銅若くあれど一々見るめなすれに記さ

此列若くは鐘類の古物あり言祿宝徳天文等を見ても
祭礼のめに出入りする鐘二枚あり金銅をなすが言わぬ類
其の多くこの鐘を撫て己の鐘をこきりしり
て此の鐘をなする好信ありて好むるをあたすゆえ手能
く禁し置かざるに於ては肩をつけたりして用
ゆえ繩張しをくこのことをいふなり
亦形ゆえに中禪寺戒壇堂にあるものなり男女二作あり
傍ありて是れより二三寸はず通る期以ちのものか又板木に





利休自筆

予て建ぬる友人を御以て其文の御辭せは
予も其意ありて見聞せり」とあり此碑の石向
せんたるや亦林若きと云
藤原公純末の御は幅の御せたる茶籠と一と筆に
乃一もた一もたの御

志しきも入言あり本林乃竹新林也

とあり其御もさうざあり其御の竹意味別延花漢の御茶の

とあり其御もさうざあり其御の御

多岐即心
古碑

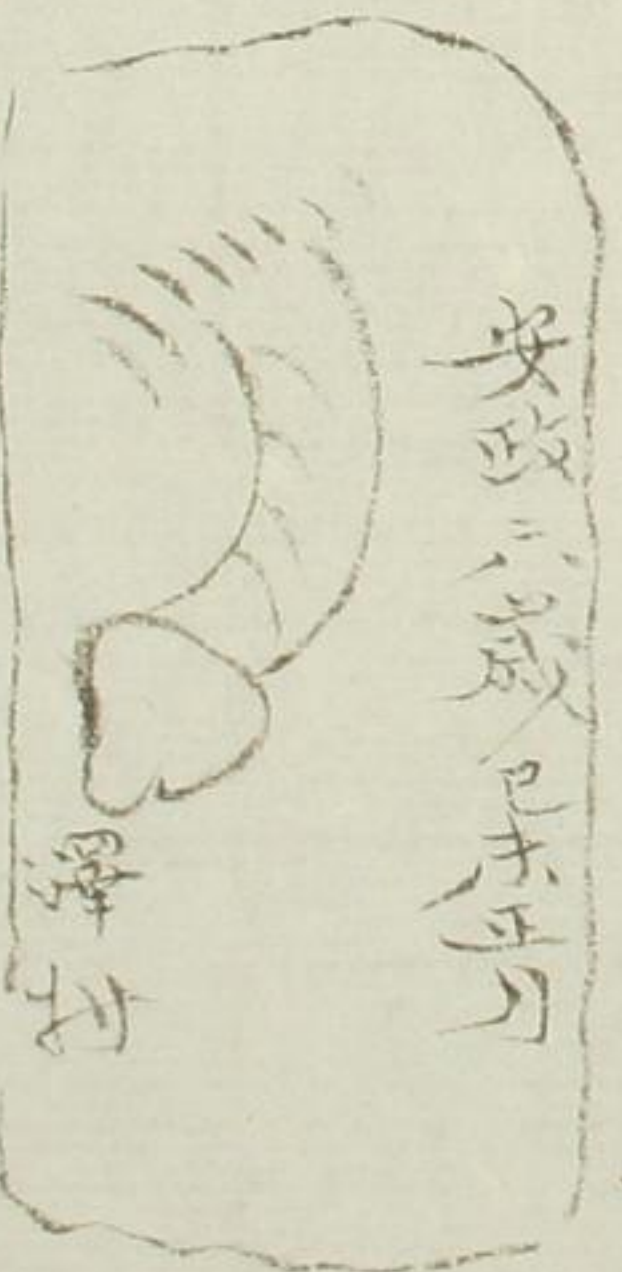
真砂即山妙法寺の古碑二七本ありとその中、年號あり
もの承○二年八月十六日右志者乃慈念也此碑其意あり
又其意は二年二月九日とありものあり其意の御あり
と本林松と云意ありとの語し

長建極
の道神の碑

右古碑石の上あり其意あり
と二三の如くあり

長建極の御本寺大寺相と云此碑の御あり其意あり
とあり其御もさうざあり其御の御

安政二歲己未正月



長建極
の道神の碑

故神田寺字の御本寺大寺相と云此碑の御あり其意あり
とあり其御もさうざあり其御の御

黄小のり候共にあつたものもなり

高麗

大正の年一二月の生塚より四の三日不承銅

華菜

成慶寺の娘を嫁にす。蘇州の長菜を食す。華菜を食す。

老の召使をいかにし。所領の老を召使にす。密に埋葬

せしむ。三光寺の

三光寺の

三光寺の寺に於て九年の月免許をす。其の年、娘を嫁にす。

香具を世に傳へり。文比の年、舟を八河に送りし。高の

香具を世に傳へり。文比の年、舟を八河に送りし。高の

天龍寺の

天龍寺の前の劇場、娘を前迄に在り。永年向の邊に

にて一方をとり、入場料二十八文なり。其の節、九文なり。

定持

定持の寺に行き、埋蔵

人の娘を見て、我れ直せ。娘を見て、をなす。

寺の前の坊が、葉をわけて、坊をわけて、葉を食す。意入り、葉を

食す。意入り、葉を食す。意入り、葉を食す。意入り、葉を食す。

意入り、葉を食す。意入り、葉を食す。意入り、葉を食す。意入り、葉を食す。

心

かく心裁、大正初年、娘を嫁にす。即ち、その年の終りにあり。

右邊、其の言、十年と、刻せり。舟三の日後、いさ

中野三童
塔の建
の木

中野三童塔ありまの木の塔あり世人中野長老の塔といは
るなりは造立の施主村に叙家忠重身又婦の者邊
りて男體の背後に施入塔場寛永十一年十月とあり
女體の方には施心妙塔寛永十三年七月七日頼師法印
秀雄とあり塔より一又寺男丸男に桐の紋あり
下とありし刀を帯び女は鳥の禰禰とあり
の八ヶ所に擬したる石碑各々にあり又久元年
舟建とあり
大川を流元禄七年末方久保に密火なる大川を七道(裏)
元禄九年中野に起上したる大川を今の中野橋
辺とありしとあり字の塔の也と使用したるものなり

大川の
流

中野の
久保

中野久保の教子

十月の初めに海軍始末の成る道にせしむる塔あり
同様に武蔵坊 湯を捨すの草庵主程なくの堂に近よ
れば数多の男女がかる度とあり女は道華經の用
帳を記し信樂のついでにのりけ豆腐ありとあり
塔の東に水鏡川あり
塔の南に寛永年間中野坊の卵を煮るに命せられ塔あり
りて城の塔に三の丸に上りてをりありありありあり
也此の塔に塔の作りしなり此の塔に塔の作りしなり
塔の塔に塔の作りしなり此の塔に塔の作りしなり
塔の塔に塔の作りしなり此の塔に塔の作りしなり
塔の塔に塔の作りしなり此の塔に塔の作りしなり

中野の
苗

島也ありて移り

此上の苑に於て五千本ありて移る三百本

心里に於て三千本ありて移る二百本

三の丸に於て三千本ありて移る二百本

其他の三宮の三郷より又移る大久保の庄より多かりし

安政年河内守の一家稠密若化し通ずぬゆゑ中野の橋

りたりしに於て移るに違移る今時方好運代々備等の名産

ひり

安不見橋の
遺信也

安不見橋より移るに遺信也婚姻の縁成ぬらざるに三年十月
サハ遺信也移るに遺信也及一家の昔いふと移るゆゑ其の
好むを移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月
移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

の遺信也の橋移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

安不見橋の
遺信也

中野長老の助氣を埋めたるに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

代見名の別邸成趣園より伊勢入通加太入兵衛の助氣

を中野に埋めたりしに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

園中筋天也の如き中野に埋めたりしに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

此の如きものあり良女を移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

此の如きものあり良女を移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

此の如きものあり良女を移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

此の如きものあり良女を移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

此の如きものあり良女を移るに遺信也の縁成ぬらざるに三年十月

安不見橋の
遺信也

人肌觀音
と古碑

人肌觀音の如しゆに
を人肌の如しゆに
の文あり玉物塔乃文明二年の板碑あり

庚申

庚申堂中法台あり長久保元祿四年九月二十一日刻す

下法谷
三寺の
鐘

下法谷靈泉院の鐘ハ文化元年の鑄造なり
祥雲寺の鐘ハ正徳三年なり

寶泉寺の鐘ハ宝曆十二年なり

寺に南基法若重木の碑なりと云ふに正應五年九月二日の
刻し表ハ後人の文を刻せしものありと

鐘分街

鐘分街道と云ふ金玉の湯前より金吾橋を渡り糞袋方面に
行く道と云ふ鐘分街と云ふ又字違木の地文と云
ふは法山と云ふ木のありしもの名なりと云ふ

大久保
の
歴史

大久保の東西の名所の起りハ天正十二年二月刻せ
しに始まる

百人町

百人町の慶長七年御考考なるの決断を以て
大繩の結とせられ大久保を大繩に改むと云ふ

板橋

板橋天正の板橋天の一なる(本橋 大久保 橋の例)

東の街

東の街なるは此の所の所長天光寺の前里塚より華園迄
境の北行し戸の北に在り

大久保の西の里塚の道ハ此の如く所々里塚の在り

しとのあり徳川の代には此の道と云ふ

武蔵川越より戸の狹路には常々此の道と云ふ

大久保
の
歴史

大久保の西の里塚の道ハ此の如く所々里塚の在り

自れは火兵場と称する今の越前場の五箇の地邊に
砲聲硝煙疾風の如く今然理無きものありぬが如し
今方ふ海の道也如何乎

神功神皇正統記
水鏡

神功神社の御可村社なり水鏡の言はるる己亥年十二月
刻しあり又天和二年三月吉日と刻せし碑あり

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖也予ある年二亮朝院の道宗の考院鐘の言ふ
年丁未三月廿八日御主尾高塚高祖也大工と刻す

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
三の御親高祖高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

此の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
此の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
此の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

高塚高祖
高塚高祖

高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ
高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ高塚高祖の言はるる言ふ

井藤村
下新庄
中道寺

井藤村觀象寺の鐘、安永四年十二月二十一日の
半鐘、寛政五年のものなり

中道寺、下新庄、寛政二年の鐘造なり

善通寺
通可齋

井藤村大字井草寺北条より善通寺に遷し、一帯の庄園は
善通寺の領あり、善通寺といふは、大寺の跡なりと傳説せり

おきん塚

おきん塚

おきん塚、下新庄、古来の寺とす、古来の寺とす、古来の寺とす

大將寺
大松

大將寺、大松、大將寺の寺、大將寺の寺、大將寺の寺、大將寺の寺

葉鐘塚
性

葉鐘塚、性、葉鐘塚の塚、葉鐘塚の塚、葉鐘塚の塚、葉鐘塚の塚

二井寺
獅子塚

二井寺、獅子塚、二井寺の寺、二井寺の寺、二井寺の寺、二井寺の寺

高井寺

高井寺、高井寺の寺、高井寺の寺、高井寺の寺、高井寺の寺、高井寺の寺

月が丘

月が丘、月が丘の寺、月が丘の寺、月が丘の寺、月が丘の寺、月が丘の寺

三田古井の
傳説

靈験ありとて遠近より参詣人あり其境の二十餘年前
の池あり新敷き一尾の川魚を捕りて其也日此の池
とす然るにこの池の魚数河内となく一服を食し夏は
の妙をど下流に隻目の魚をとらるるものありとては其
の魚なりとて婦人來りて再び右の池に投つと
三田の古井なる井戸あり其邊にありて九又許古井とあり
此人は古井に昔より居りし也其也日此の池ありしを
付に古井に殺し其の中に入りて其也日此の池ありしを
傳説井の歌ありて其也日此の池ありしを
ありて何れも其也日此の池ありしを
三田の釜と稱して其也日此の池ありしを
馬籠と角かぬ蔵田外に馬籠とありて其也日此の池ありしを

馬籠の
力

馬籠の莊跡しる井戸あり長泉寺境の北にあり其也日此の池ありしを
周圍を廻り里俗これを長泉寺の馬籠とて又八月十日
即ち同日あり十日の日に此の池ありしを
す馬籠二十年余廢絶し角力の力僅に
永泉寺の市あり及二平には下る井戸あり永泉寺
内に市あり角力を
馬籠(古井)あり其也日此の池ありしを

永泉寺の
市

多摩郡
と刻せ
の碑
金口

多摩郡は元永年向ひとて多摩郡と稱せし
中野三層塔の地あり十歩に唐中野の碑に
武蔵多摩郡中野塔
九州筑前國内田郡
本願寺野吉左衛門(外五文)

千代谷
赤松
の木材

の夜をてし、と数年かあり、後、電車通つと、
ひびきを度し、林の宮殿に、素木、松、杉、と、
このかた、向う、と、林、の、電、路、を、
線、の、な、め、ら、い、と、
千代谷、と、
の家、と、
の、家、と、
心、也、と、
樹、を、

大久保の森

を、
経、た、
古、
な、
明、
し、

大久保の森

を、
経、た、
古、
な、
明、
し、

四谷天王社
石坂の文
筆者

四谷天王社の四石坂の石坂に、
四谷天王社の三丁目北側に、
能筆、
書、多、
屋、

中野の馬
屋

中野の馬屋、
西三丁目南側に、
鋪、
佐、

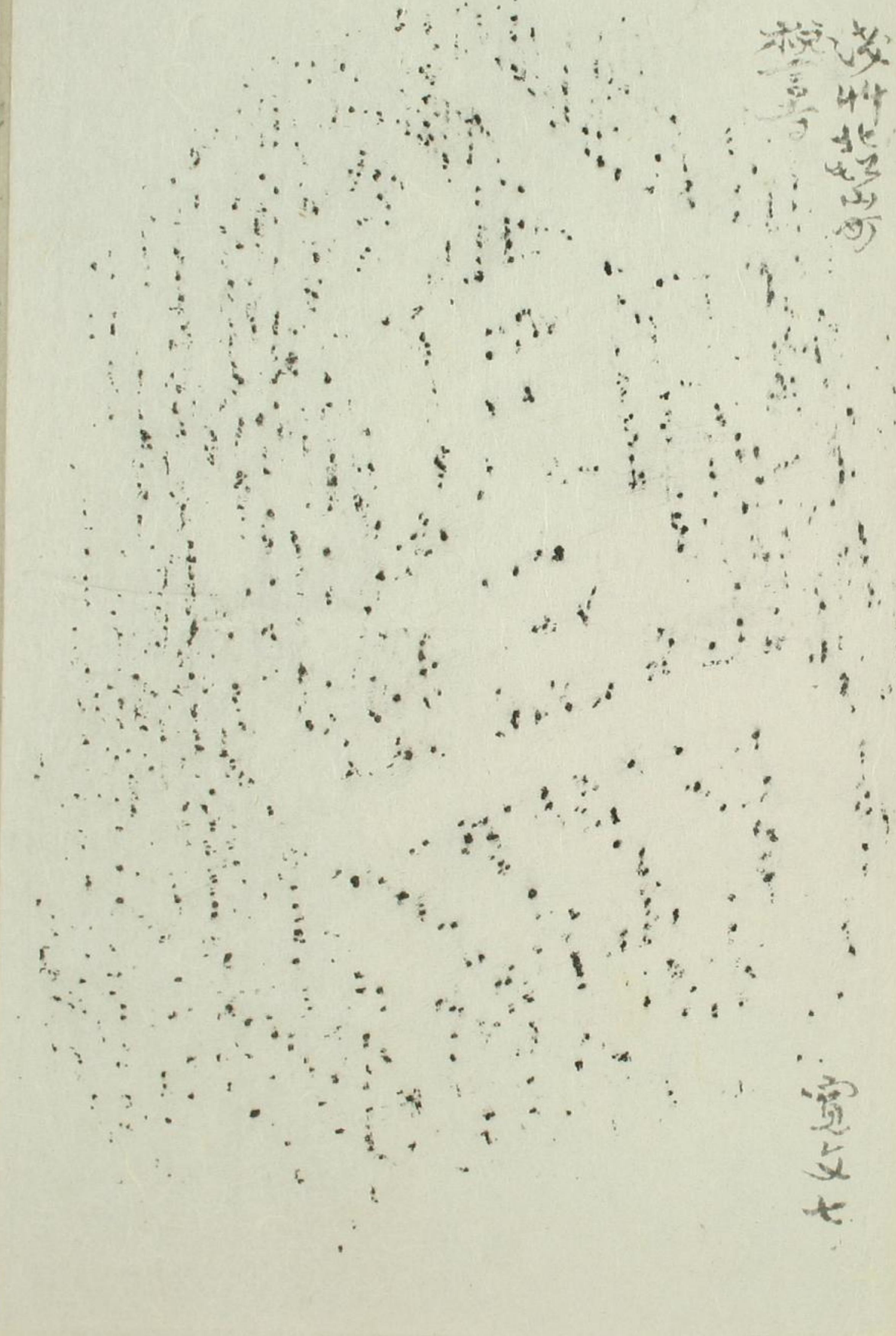
繪巻の
巻目

云々繪馬のりうめは家より徳方の神仏に納り繪馬
を出せしと今の佐吉の親なる若定吉といひる繪馬
徳方の注文にありと画さししと今の主人等も其共
の母方よりとさすか定吉は老母の息人なりとありし
繪馬の草のり外有るなる四家の日高家の繪馬の画
馬を惜ししものりと横長の歌馬絵なるを画
きたる日高公繪馬の馬を惜ししと今の主人等
に画く種数とさすに
神仏数にさすは必藏なる不動觀音日蓮上人弘法大師
天満宮鬼子母中これには石梅の枝を持つるものとあり

とさすは合掌とさすあり
動物には馬牛虎蛇鶏鷹鳩猿狢猫猿狐鯖
犬等なりと又魚の面天物の面を画く
不動等の劍の備餅の神面徳利
の字縁ゆり樓の男女並を向けを圖
男女祈願の圖
中世の繪馬をさす画にさすものをも繪す又ハ昔
とさししとさす入りて又入りてとさす
畠山ゆき寺の繪馬半蔵をさす寺の
畠山ゆき寺の繪馬半蔵あり今あるもの千四巻の下

淺草校
三つあ
鳥の
三つあ
形

淺草校
三つあ
鳥の
三つあ
形



浅草校

物さう雨してあれが
大目鏡とふあんとそれ
リ三又三寸のまよ
柄干段巻くま
今う長さを
三つあ
鏡の
の
あり

三つあ
鳥の
三つあ
形

鳥
千時寛永廿一年
大原左馬守
二月廿一日

此墓物銘録の
祖文の墓と云ふ

寛永廿五年
為仲山云用之
丑月十日
左馬守

寛文四年の
春

寛文二年



万曆三年の
世に於る

三保三

以下祝言寺墓心一ある鳥前
大正七年六月甲子日

四二五
の解

よら... 解... 十の... 七... 七...
...の... 解... 十の... 七... 七...
...の... 解... 十の... 七... 七...
...の... 解... 十の... 七... 七...

館林及び羽生の
大板研

二... 館林... 羽生... 堂... 高八尺中六尺...
...の... 解... 十の... 七... 七...
...の... 解... 十の... 七... 七...
...の... 解... 十の... 七... 七...

天水の墓

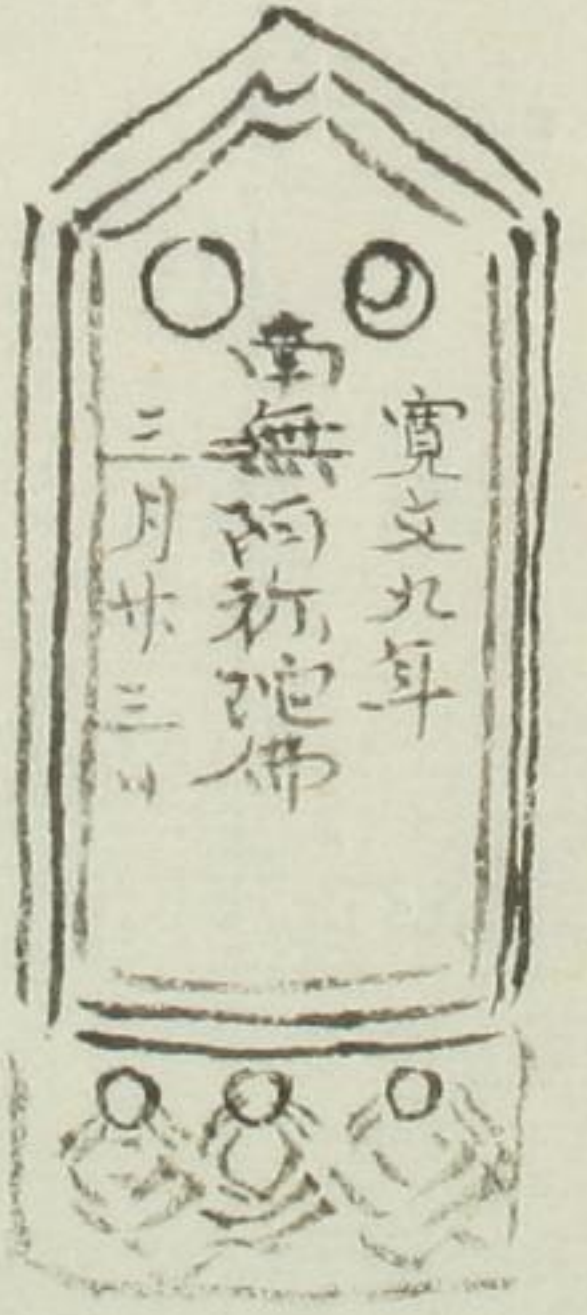
真如の教
此の如く
唐中

建長九年の年疏ありと云ふ事ありしに
仰せの如く天水の墓所あり成平北山行
三村の如く云ふ事ありしに増進去帳を
天水山中如之墓と道去帳に記載ありとの事
以て真如の教境の教喜也成平と云ふ事
に堂ありてありて木綿の籠巾及び
いそ首以下見す有る事ありしに
す也成平の如く云ふ事ありしに
其の如く云ふ事ありしに

天水の墓

天水の墓

年子不明ありしに
又天和三年の正親善三郎
同前文に云ふ事ありしに
申す事ありしに
観音堂境ありしに
天水の墓ありしに
種々物を集りてありしに
父人の子ありしに
木を思ふ事ありしに



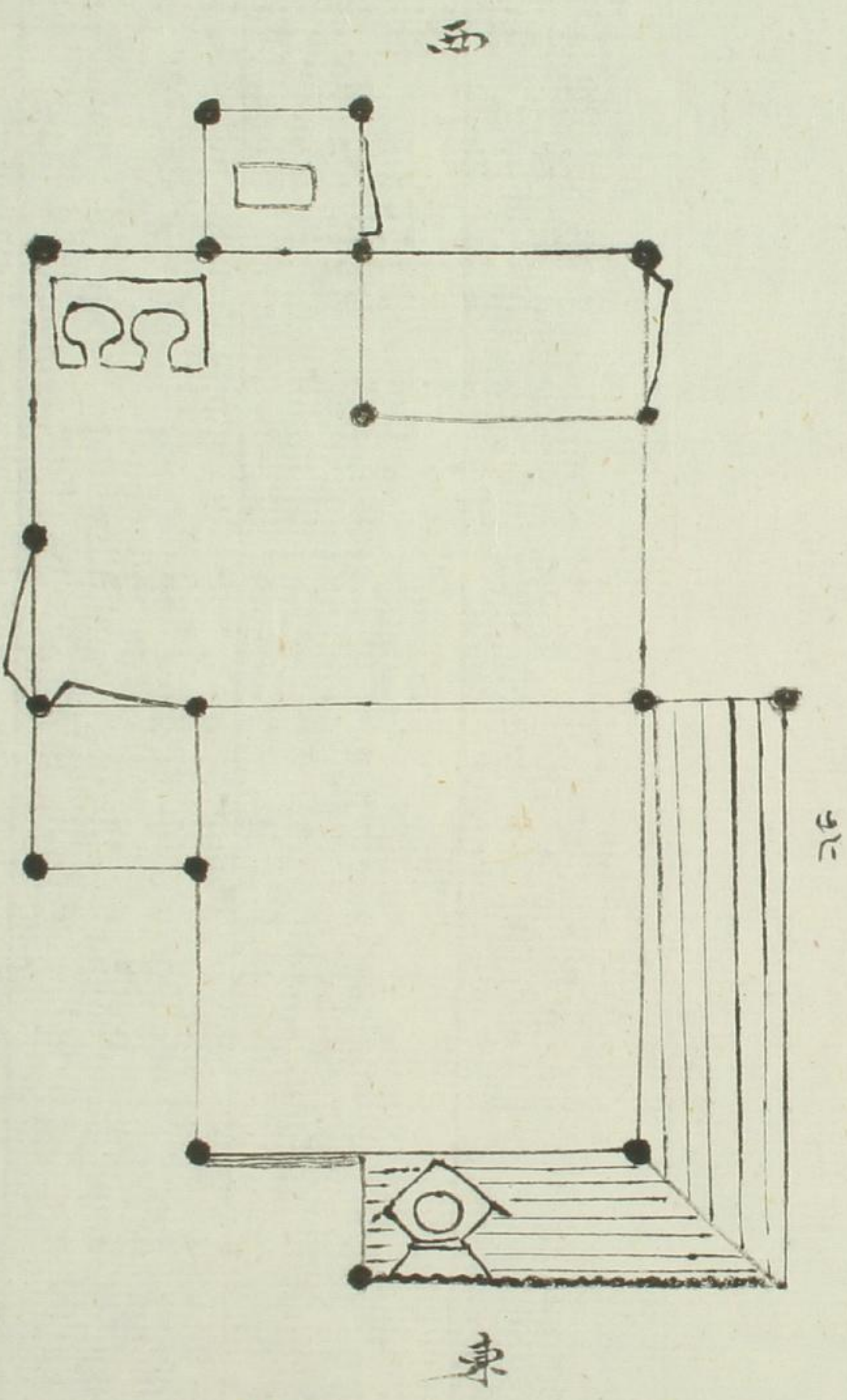
大野の
大野の
大野の

大野の
大野の
大野の

大野の
大野の
大野の

所唐の理一丈の未免の...
 川一柱の蛙等特...
 申年の... 駿河國丸...
 の形... 其... 大...
 あら... 年... 吉...
 西... の... 東...
 元... 年... の... 寺...
 大... 年... の... 寺...
 大... 年... の... 寺...

西谷天龍寺胎胎石ヶ番所跡圖



七

右に書くは、建武の國の、
の如く思ふ、或は、
とあるは、
とあるは、

附

一 此書は、
七、
子、
今、
一、
一、
一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

文政十三年
考古會
七

七考古會の最初のものが...

考古會の最初のものが... 考古會の最初のものが...

考古會の最初のものが... 考古會の最初のものが... 考古會の最初のものが...

杏所 北亭 洞齋

佛庵

恭母

江山

文二

華山

蔣原

東陽

會東 足利屋久成
神田丸屋忠八 全孫

右諸先生審定
毎年三月九月廿日天神中以下篇を別當宝性院
古物三會に確り向不論晴雨晝時以下り来るが...

右の七に叙せ張りて... 文書しある

文政十三庚辰初會のよ... 美成とある所の
栗原の致... 美成をいし

馬琴... 美成とある所の

伊波の神
伊波の巫女

伊波の神の二種あり信忠のちこも年計十六七より同為千石の女
新入道とてあをよみて呼ばるもその一人の男は父一行中
かり居ることの被書結の呪言をいひて髪を剃るあして三三三
十サレシカ呼ばるも又初午に髪を剃るの日に三三三とい
はれの見世を借りて寄るをなす
死者の二寄すに三三三といひて水向生者も三三三とい
水向して二寄すに三三三といひて母の三三三
東京正新物館に香のまゝ出古銅の龍歌あり
銘 嘉吉三年七月吉日赤坂山龍歌堂主幸重
と彫しあり 信の先をいひつりたるものなり
全一の如く見えたり

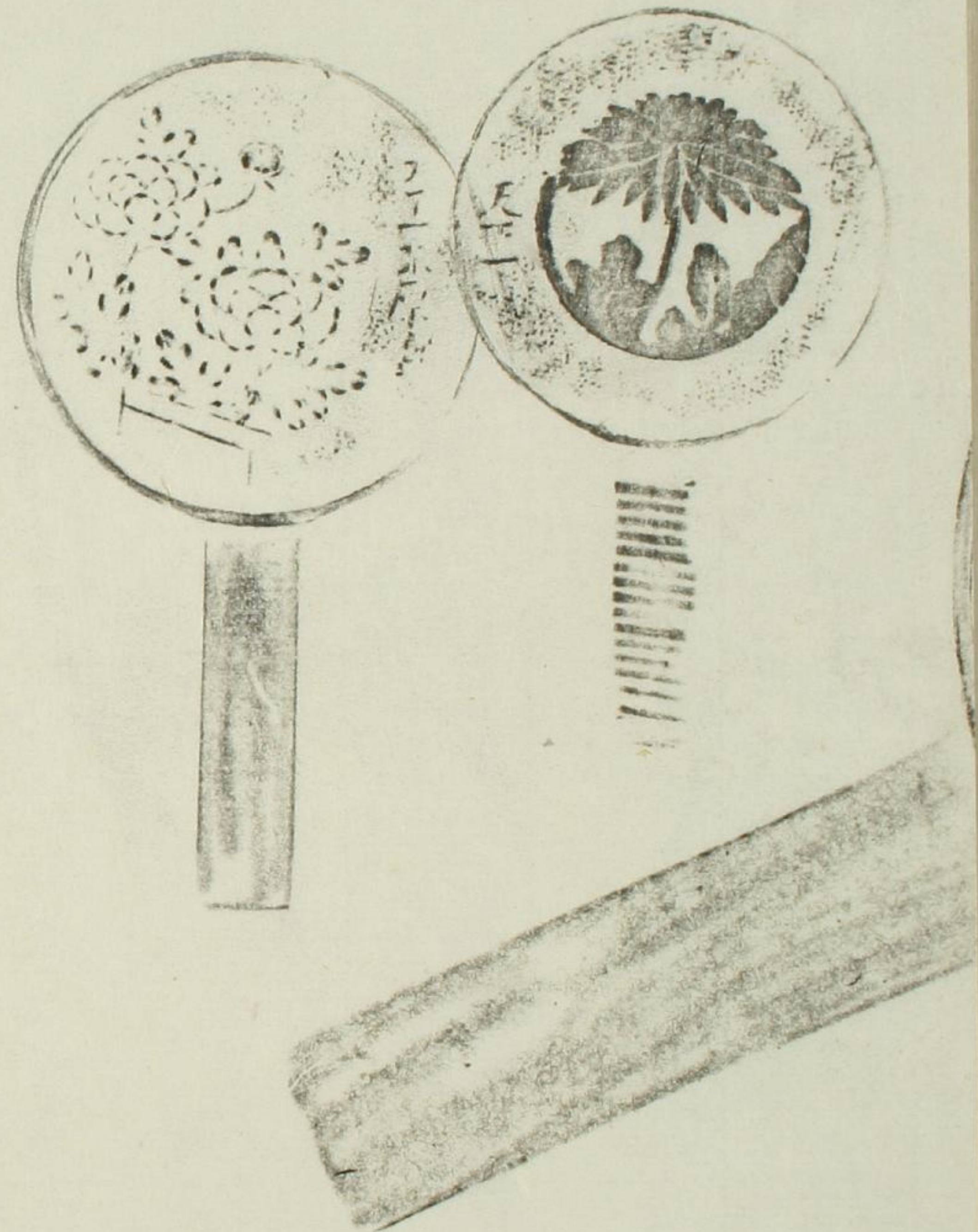
嘉吉三年の銘
あはれ歌

大和守
あはれ歌

大和守の即大和守の字の也
三小出せり其也川の
和同歌一枚を寄し今歌集に
大和守の即大和守の字の也
三小出せり其也川の
和同歌一枚を寄し今歌集に
大和守の即大和守の字の也
三小出せり其也川の
和同歌一枚を寄し今歌集に

同歌の麒麟

同歌の麒麟の玩貝に麒麟歌を
大和守の即大和守の字の也
三小出せり其也川の
和同歌一枚を寄し今歌集に

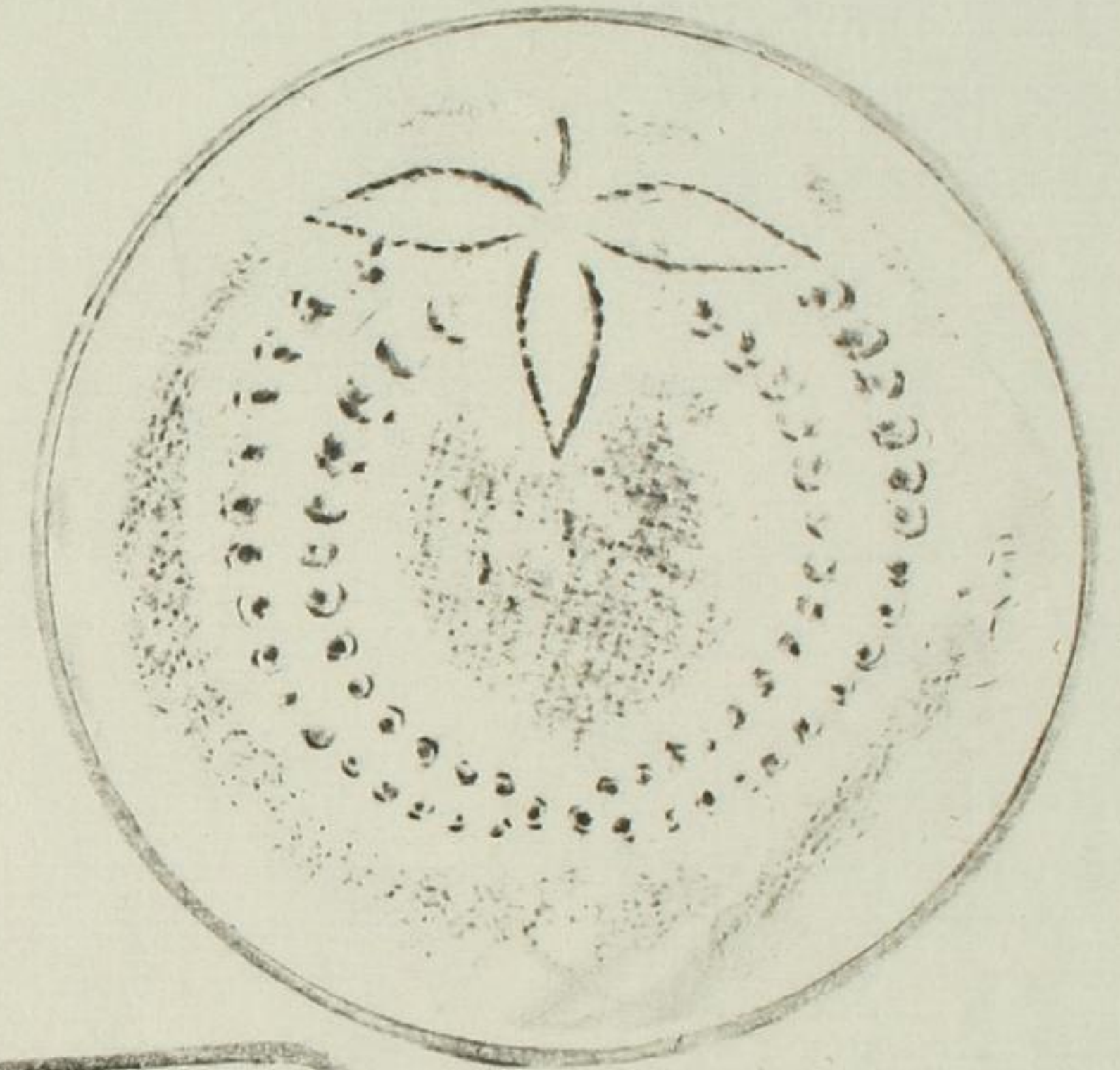


改め世茂

治世世茂

あらまの
申塔

越後
申塔



深川の向山に
 軒城に
 武少
 中
 奉
 元
 越
 木
 向

改め世茂
 治世世茂
 あらまの申塔
 越後申塔
 文禄
 天霜月廿
 越後國
 木の推
 向ま

深川の向山に
 軒城に
 武少
 中
 奉
 元
 越
 木
 向

深川の向山に
 軒城に
 武少
 中
 奉
 元
 越
 木
 向

新三州豊後
 武蔵玉川の者
 早くユツテ水カケ
 三州豊後
 武蔵玉川の者
 早くユツテ水カケ

本州の
 寛永六年
 十月十日
 治方令計

十月十日
 治方令計

新南多外
電柱の起

左のちりこちりしたまの
かきこらるるをみる

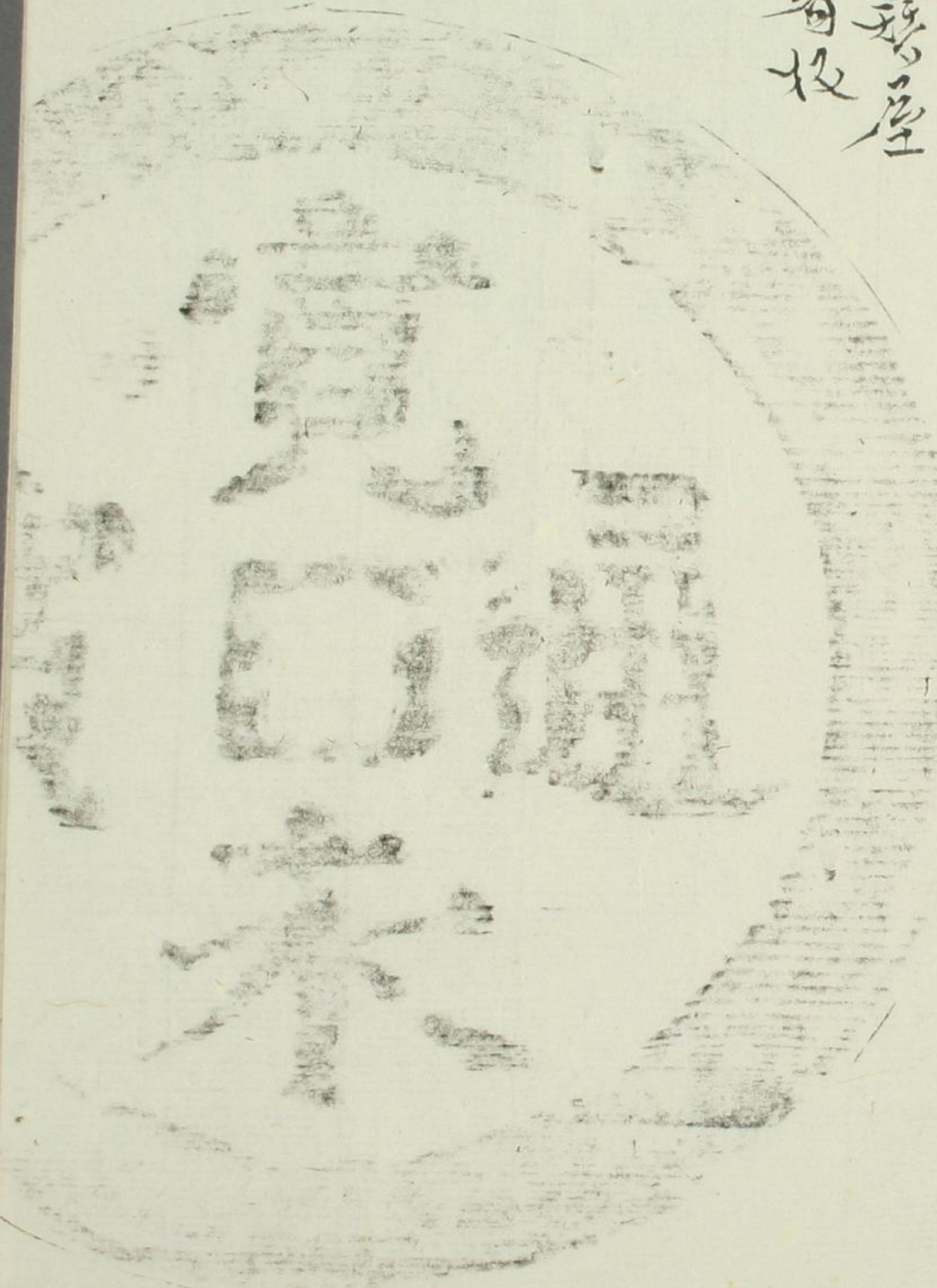
新南の電柱が
法外の名を
法外の名を
の考へるこの
電柱の起る

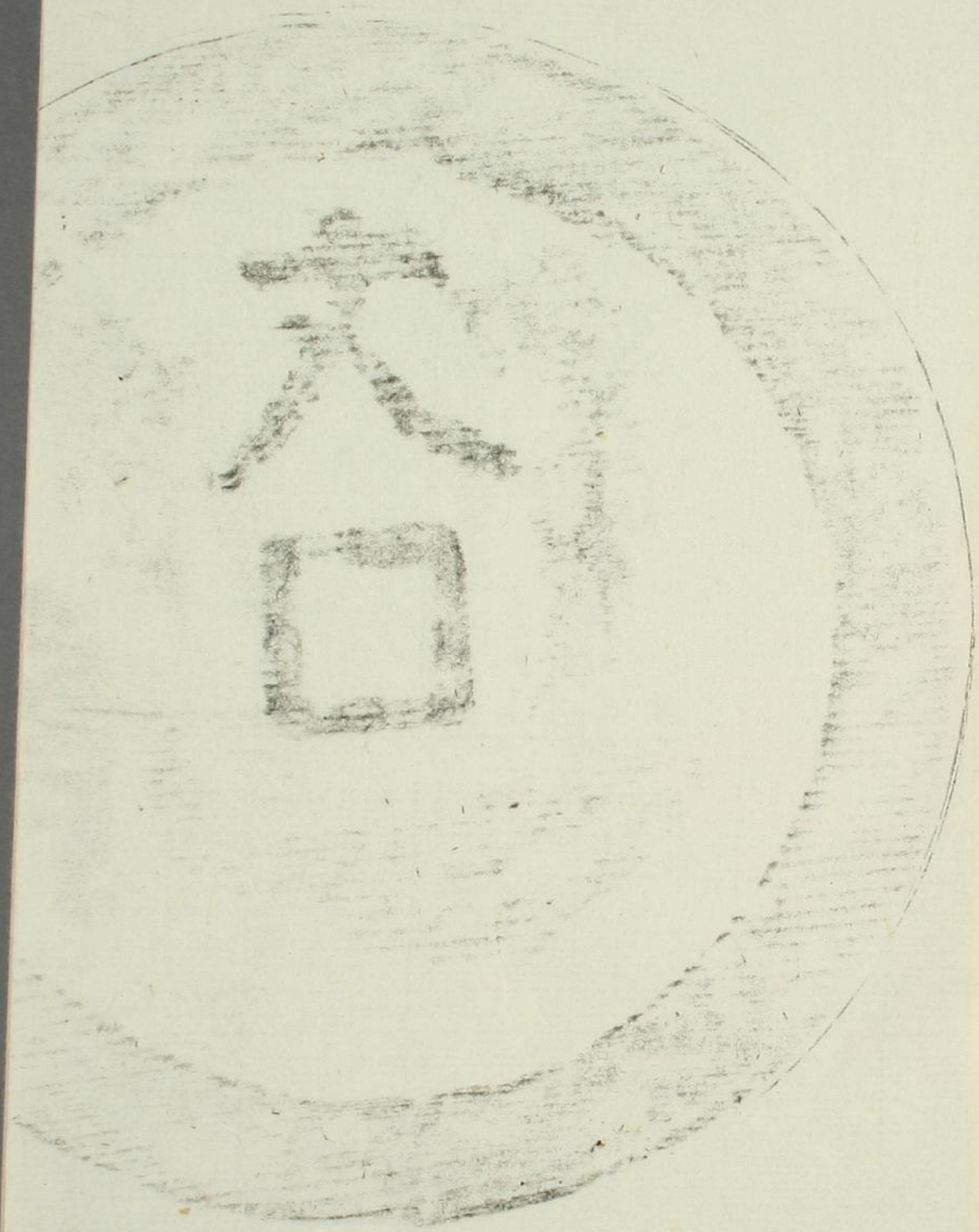
日光の起る
電柱の起る

下野の日光
電柱の起る
電柱の起る
電柱の起る

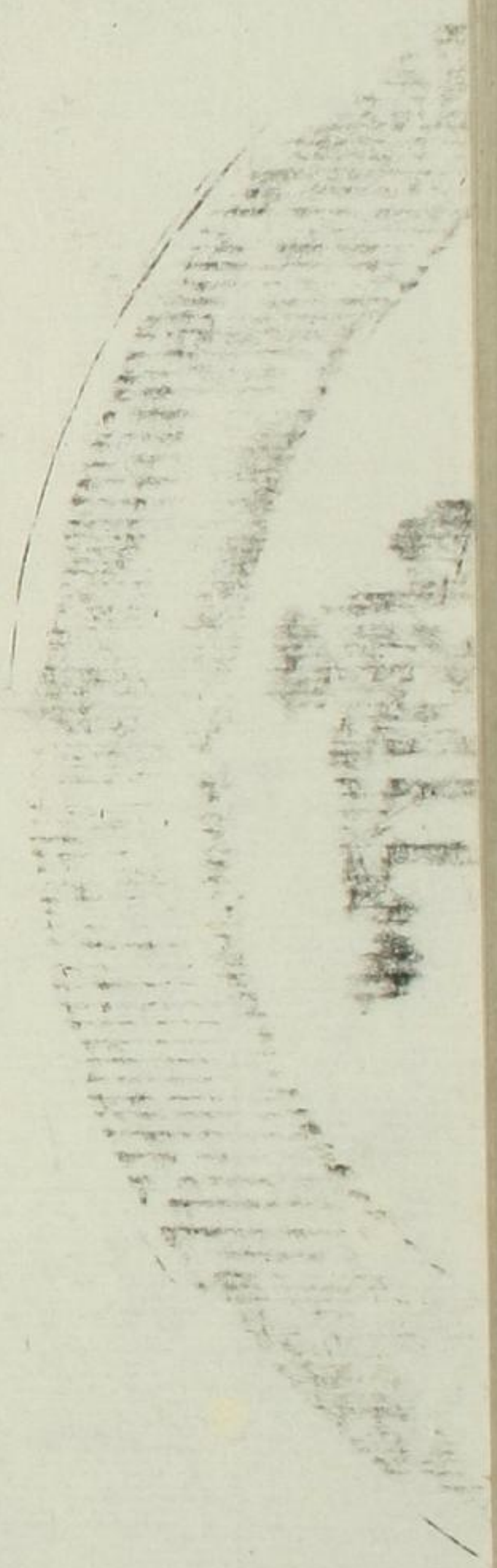
電柱の起る

電柱の起る





嫁に真鍮の収束を以て其の環を以て
娘の母の代に於て其の環を以て
形を以て其の代に於て其の環を以て
大正十年六月十日



Handwritten text in Chinese characters, including a large vertical inscription on the right side and smaller characters scattered across the envelope.

